

イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島 恒志

(第3回)

イギリスの演劇

日本がバブル真っただ中だったころ、ロンドンのナショナルシアターで一風変わった芝居を観た。題して『メトロポリタン・ミカド』。ほぼ100年前に書かれた有名なギルバート&サリヴァンによるオペレッタ『ミカド』のパロディだが、その内容に驚いた。なんと、財政に窮したロンドン市が日本の企業に買収されてしまったという。明日からCity of LondonはCity of Mitsubishiになると聞かされた市民は大騒ぎだ（数ある日本企業の中からイギリス人には発音しにくい多音節のこの名称を使ったセンスがすごい）。

これは、時の首相マーガレット・サッチャーが、文化予算を大幅に削る決断を下したことに対する抗議キャンペーンの一環だったが、驚くことに上演したのがナショナルシアターだったということだ。日本の「国立劇場」で反政府キャンペーンの劇が上演されるのはちょっと想像できない。さすが、演劇の国ということか。

昨年、もっとすごい国家を揶揄する芝居が上演された。さすがにナショナルシアターで、とはいえないが、それでもロンドン郊外で上演されるや大評判を呼び、ウェスト・エンドに移ってロングランとなった。題して『チャールズ3世』(King Charles the Third)。17世紀の清教徒革命で殺されたチャールズ1世とその後王政復古を果たした

チャールズ2世の後、「チャールズ」というイギリス国王は出ていない。つまり、現在のチャールズ皇太子が即位すれば「チャールズ3世」になるわけだ。これはそういう話である。

現在の君主エリザベ女王崩御というところから物語は始まる（おいおい、いいのか、と最初から思う）。国民的不人気のチャールズとカミラ夫妻が鬱々と不安な先行きのことを考えているところへ、国民的人気者のウィリアムとケイト（キャサリン）の皇太子夫妻がやってきて父を励ます。やがて、自分の存在をアピールするために、チャールズは議会の提示した法案へのサインを拒み、自分なりの意見を通そうとする。そのため議会は王室制度を廃止しよう…と話が進むのだが、この芝居がすごいのは、すべてブランクヴァース（無韻詩）というシェイクスピアの文体を真似て書かれていることだ。タイトルからしてシェイクスピアの『リチャード3世』を連想させるが、その連想に違わず、しっかりと亡霊が現れる——もちろん、ダイアナ妃の。さらに、やんちゃで知られる次男坊ハリー王子のセリフだけは詩ではなく散文で書かれる。だが、現実の王室を悉くパロディにして笑いを狙っているようでいて、しっかりとチャールズの悲哀も伝わり、観る者の胸を打つ。さすが、シェイクスピアの国ということか。